# 秋田ワールドゲームズ！
# 日本、地元の利を活かすか

**再び世界のトップが日本に集結する。オリエンテーリングにとって初の多種目国際大会となる第 6 回ワールドゲームズは秋田県で 8 月 16 日に開幕。世界のトップに日本の代表 4 人が挑戦する。**

## 初の国際多種目大会

ワールドゲームズはオリンピック以外の種目が集まって 4 年おきに行われる世界規模の総合競技大会だ。第 6 回となる今大会では世界約 80 ヵ国・地域から約 3250 名の選手･役員が参加。31 競技 170 種目が実施される。

オリンピックとの関係も強く、国際オリンピック委員会の後援もあり、また、テコンドーや、野球など過去ワールドゲームズの種目だった競技がオリンピック競技になるということもある。国際オリエンテーリング連盟（IOF）はオリエンテーリングの初の国際ショーケースとして位置付け、大会の成功に全面的にサポートをしている。

「我々は今大会が全てにおいて優れていることを確保しなくてはいけない。必ず成功しなくてはいけない。また、秋田で競われるメダルはとても価値があるものであり、参加する各国のオリエンテーリング連盟がトップ選手を派遣してきたことをとても嬉しく思う」と IOF 会長のスー・ハーベイ氏は IOF 広報紙で語っている。

一方、日本のオリエンテーリング界にとってもこの大会は初めて一般の報道機関にスポーツとして大々的に取り上げられる可能性を持っており、スポーツの知名度をあげることに大きく貢献することが期待されている。特に秋田では数少ない大会に参加する地元選手として代表の加賀屋博文選手が頻繁に取材を受けるなど、注目も高い。

## 地元の期待

地元秋田県出身の加賀屋は世界選手権出場 3 回になる大ベテラン。地元出身の選手として推薦選手として出場するが、実績充分である。最近一段と速さが増し、6 月の東京大学大会では全日本選手権者の松澤を抑え見事優勝。4 回目の世界選手権代表の座も確保している。

今回の目標は地元を意識して意欲的である。

「40 人出場するので、上半分を目指します。地元でもあるので、下手なレースはできないという気持ちは大きいです。そういうプレッシャーを自分の力にしたい。良い意味で、特別なレースにしたいと思います」

また、競技としての目標以外にも今回の大会ではオリエンテーリングを知らない一般の観客に見せる要素も重要である。

「道も何もない林の中を、ガンガンと迫力のある走りをするのを見るのがオリエンテーリングの醍醐味」と、山の中での走りをレクとしてのオリエンテーリングしか知らない人達に是非見て欲しいと加賀屋は考える。

「レクリエーションとしての側面も大事です。しかしそれだけでなく、より速く、より正確に走る競技であると言うことを知って欲しいです。競技としては、非常に厳しいものであるということをわかってもらいたい。そういう点をアピールしていきたい」

世界のトップを相手にどれくらい戦えるのか。

「自分の理想としている形のレースを完全にコントロールした上で、最後まで集中して走りきることを目標」と語る加賀屋は、ここ一番での集中力はすばらしく、地元開催のプレッシャーがプラスに働くことが期待される。

## 競技としての認知

競技として認知して欲しいという思いでは全日本優勝で代表となった、松澤俊行選手も同じである。

「できることならば、競技的側面をもっと理解してくれる人々が増えて欲しいですね。例えば、スキージャンプをやる人は少ないけど、競技として知っている人は多い」

その認知の違いは日本代表チームの強さに一因があると松澤は自覚している。当面の目標は中堅国としての位置を固めることである。

「参加者のレベルはとても高いので、真中を目指します。世界選手権でも一緒なのですが、現在は中堅国としての位置を確立することが日本の中期的な目標です。長期的には上位で争うチームになって欲しいです」

その目標は「ときに、遥かなる道に思えてしまう」こともあるが、松澤の視野は長い。45 歳まで速くなり続けると言う。

「このスポーツは知的側面が強いと思うのですが、例えば、皆さんが囲碁や将棋でそれくらいに年齢が第一線で戦うことを驚かないように、オリエンテーリングでもそういうことがあってもいいじゃないかと、その可能性を探りたいと思います」

既に 10 年となる競技人生に、松澤はまだまだ飽きないという。

「やればやるほど奥が深いと感じます。オリエンテーリングはとても知的でありながら、同時に格闘技のようです。自然にぶつかりあう必要があるのです。その要素は色々なところで顔を出します。そして、自分の実力を試すためには、いろいろなことをしなければなりません」

その奥の深さが松澤を 45 まで競技に引きつけ、速くなり続けることを可能とする大きな要素なのだろう。

## 楽しんで走る

金並由香選手は自分の現在の日本を代表する位置を楽しんで走ってきた結果と考える。

「好きなことを楽しくやってきたら、いつのまにか上にいたという感じです。楽しく走るためにはトレーニングしないと思い、トレーニングをしていたのも良かったのかもしれません」

秋田でオリエンテーリングが一般の観戦者にアピールできる点は他にもあると金並は考える。

「オリエンテーリングの地図と言うのは面白くて、どこの国にいっても共通の言語なんです。同じ様な情報が一枚の地図から読み取れます。その地図を通して、言葉では通じない人達とコミュニケーションが出来るようになって面白いですね。同時に、この地図の読み方がどの国も同じという点で、やっぱり、人間は変わらないんだな、と思える点も面白いです」

金並のオリエンテーリングへの取り組みは純粋にオリエンテーリングというスポーツへの愛の表現のようにも思える。

「とにかく好きという感じです。ずっとやっているので、しないということは考えられないという感じです。かといって、おしつけられるのは嫌なのですが」

しかし、それは、競技としての結果が全く関係ないということではない。むしろ、ある意味では厳しいかもしれない。自分の理想の走りが基準になっている。

「自分が自分の走りに満足できれば良いと言うことですか。走り終わったときに、楽しかったという風に思えれば。例えば、地図をしっかり読めて、体力的にも、気持ち的にも、うまくいったということです」

この理想の走りが実現できたときには結果が出るという。しかし、海外の国際大会ではそれがまだ出来ていないという。秋田でも、満足するレースが出来れば素晴らしい結果が出るという期待は高い。

## 若い挑戦者

今回の代表で最年少、塩田美佐選手は初の代表である。従って目標は順位よりも、自分の走りにあると言う。

「まだ私には、世界のレベルと、自分との差がよく分かっていません。世界選手権に行けば、もっと自分の位置が具体的に分かってくると思うのですが。だから、目標は順位的なものよりも、自分の設定した課題をうまくこなすことです」

その課題の一つはより安定したレースである。昨年度も塩田は東日本大会を優勝するなどずば抜けた成績もある一方、インカレでは不本意な成績に終わるなど、レース内容、そして結果に大きく波があった。

「もっと安定してイメージ通りのオリエンテーリングを目指したいです。今はまだ、レース中に抜けてしまうことがあるので、そこらへんを直したいですね。そういいつつ、思い通りにいかないのも、オリエンテーリングの良いところです」

塩田にとってオリエンテーリングの魅力は知的な要素とその自由の度合いの広さにある。

「ただ走るだけでなく、地形や地図を使って進むところが面白いです。運動をしたり、走るのはもともと好きだったのですが、もの足りませんでした。その点、オリエンテーリングは頭を使ってやるのが魅力です。特に、自分で自分の進むルートを決めるところが良いですね。そういった自由な点が魅力です。もっと一般の人にもそういった魅力を分かって欲しいと思います」

同時に、一般の人の持っているオリエンテーリングに対する認識を変えたいとも考えている。

「もっとスポーツとして捉えて欲しいです。一般的な印象は実態と大きくかけ離れているので、もっと本当の形を分かって欲しい。人によっては、散歩のように思っていたり、逆に、何かフットボールでつけるようなプロテクターを着けていると思われたり」

オリエンテーリングにとって、正しい認知を得るのは、まだまだ長い道のりかもしれないが、秋田のワールドカップは大きな機会になることは確かである。

文：
山本英勝　hidi_o@yahoo.co.jp